

〔一般論文〕

“忙中閑”にみる竹内吉正の思想と「永田幹夫を囲む会」

— 1994年～1998年の日誌分析を中心に —

中 崑 洋

I. はじめに

竹内吉正（1921.1.15-2008.12.14、以下、竹内）は、1991（平成3）年8月5日、社会福祉法人小諸学舎理事長に就任するが、ここに至るまでにはその契機となる急変事態や彼の熟慮があった。例えば、同舎前理事長、花岡暉夫の急逝や郷土史・宗教史に対する学究心の高まり、さらには、71歳の誕生日に実感した各職員（担い手）の資質向上についての熟考などがあった。この流れのなかで、竹内の知的障害者福祉観の構想が展開されていくのであるが、これを具に把握するためには、竹内が同会に着任してからおおよそ3年が経過していた1994（平成6）年以降の彼の職務や思索を捉え直さなければならない。

そこで、本稿の目的は、竹内が『一羔^{いちこう}ニュース』編集や『月刊 福祉施設士』への寄稿の一方で、同会理事会や「永田幹夫を囲む会」（1997年8月7日）などへの参加から、少なからぬ気づきや展望を得ていた1994（平成6）年～1998（平成10）年までの竹内に着目し、彼の思慮や構想を彼直筆の2冊の日誌 [『3Year Desk Diary 1994-1996』（1994年1月1日～1996年12月31日、本稿では日誌Kとする）、『RECRUT 1996』（1996年1月1日～1998年5月30日、本稿では日誌Lとする）。] 及び『月刊福

祉施設士』に連載された“忙中閑”記事などの分析から、実証的かつ具体的に論考することを通じ、この時期の竹内の思考の特徴及び彼が考究していた社会福祉観とはいかなるものであったのかにアプローチすることである。

なお、倫理的配慮としては、竹内関連史資料の引用並びに研究の範囲内での公表の許可を彼の実兄、花里吉見氏から得た(2009年10月3日)。また、筆者の所属校の研究倫理審査委員会から承認を得た(中京研倫第2019-007号、2019年7月17日承認)。

以下、Ⅱ章では竹内が奮闘していた『一羔ニュース』の編集業務及び『月刊 福祉施設士』への寄稿に着目し、“忙中閑”記事の内容分析から、彼の思考の力点を明確にし、Ⅲ章では1995年所感と国家試験社会福祉士試験に向けた彼の勉強から、彼の苦闘や考想を詳らかにし、Ⅳ章では竹内による聲かけ全職員へのアプローチ及び社会福祉についての熟考を把握し、Ⅴ章では各種会議・理事会での彼の見解並びに「永田幹夫を囲む会」への参加の実態をを考証する。

Ⅱ. 『一羔ニュース』原稿執筆と『月刊 福祉施設士』への寄稿

(1) 『一羔ニュース』原稿の執筆と先覚から受けた影響

人口高齢化率が14.1%となり、名実ともに「高齢社会」の仲間入りをした1994(平成6)年のわが国では、早急な公的介護保険制度の導入や本格的な年金改革が検討されるなど、人々の老後の暮らしを社会的に捉えようという動きが活発化し、後期高齢者になる直前の竹内自身にも、その後の生き方が問い直されていた。加えて、社会福祉法人小諸学舎理事長の重責にあった彼にとって、自らが関わる知的障害者の行方についても懸念が少なくなかった。こうしたなか、竹内が着目したのが、『一羔ニュース』や『月刊 福祉施設士』などのメディア媒体を活用した知的障害者福祉への理解の促進であり、記事執筆に身を入れていたことを示唆する記述が、1994

(平成6)年2月6日以降の彼の日誌に見られる。具体的には、「あたたかな一日であった。久方に主日礼拝に出向く妻も共に出向く。吾だけは早朝起床、一羔ニュース原稿の取組みにかかる」(日誌K:1994年2月6日)、「朝、一羔ニュース10月号原稿が総括され、10時には完全に完了した」(同:10月5日)、「一羔Newsの準備も始める。当面は西駒郷の講演準備と社会福祉士資格受験のための受講レポートの作成に心を集中し、全社協と愛護協会双方に提出準備する。午前、午後ともに事務上の書類作成に力を注ぐ」などに(同:1995年1月28日)、時宜にかなった話題提供が施設長としての竹内の課題になっていたことが窺え¹⁾、講演活動や受験勉強をも併行していたことが認識できる。加えて、福祉作業所における地域ニーズへの対応という視点から、以下のように論考している点も注目される。

総務・運営会議に最も新しい月計・試算表を提出、基本情報公開する習慣をつけること。“一羔”ルーツ源泉。パールマンのシステム論4点、その応用と共に学習すること(特にVolとの調整で)、集団思考と一羔運動舎生のこと、職員のこと。パジャマとひげそりの共有基盤を求めて、個と集団(聖書という文化的存在)。社会福祉は社会全体の福祉の中で個人の福祉が保障されていること(福祉の思想)糸賀“社会福祉ということばは、あくまでも「社会」という集団のなかにおける一人ひとりの「幸福な人生」(福祉)を指すものである”。(日誌L:1996年12月9日、丸括弧内・鍵括弧内ママ、傍点筆者)

上記から、竹内は、一羔の史的変遷を捉えつつ、H・パールマン(H. Perlman 1905- 死亡年不詳)や“障害福祉の父”と称された糸賀一雄(1914.3.29-1968.9.18)らの先覚を想起するなかで、個々の幸福を社会的に把捉する意義を改めて明確にしようとしていたことが認識できる。但し、

そうした着想をいかにして得ていたのかということや知的障害者と日々関わるなかで、彼自身がどのように苦慮していたのかを捉えるには、さらにいねいに史資料を読み込み分析する必要があるだろう。

(2)『月刊 福祉施設士』誌上に寄稿した“忙中閑”

既述のように、竹内によって知的障害者に対する新しい眼差しが注がれるまでの流れを汲み取る上で欠かせないものが、『月刊 福祉施設士』誌上に掲載された“忙中閑”という彼の寄稿文である。それらの主なものとして、「ぜいたく」「“男”と“女”というかかわり」「わが立脚するところにあって」「追い求めたい像ひとつ」「としよりの冷や水」「専門性と社会貢献」などがあり、ここでは「2月号福祉施設士会専門誌に“忙中閑”として大いなる“ぜいたく”なる随筆を“八木和風”名で投稿。いい文章が出る」との記述から（日誌K：1994年2月24日）、竹内自身、同誌への寄稿においては、親亡き後の8人兄妹が和をもって助け合うことを旨として自ら考えた“八木和風”なる俳人名で投稿しているのが分かる。

この他にも、「今日一日は、机上の依頼原稿の執筆にかかる。福祉施設士への投稿である。最近の医療、福祉現場における男、女のかかわり、異性間の課題を中心に終日費やして一応完了する」（同：年5月2日）、「施設士会 Report も忙中閑の原稿を完了して和歌山への手紙を一括して提出する」（同：1996年4月27日）、「日本福祉施設士会誌6月号投稿の主題、精薄施設から観た家族・家庭について、2事例を中心に言及する。午前、午後ともに最終的に整理清書を急ぐ。24:00までにほぼ完了する。何にも事を運ばず。Reportだけをあたる」などと（同：5月27日）、月刊誌において、彼の考えや物思の一端が矢継ぎ早に打ち出されていたことが分かる。なかでも、「われわれは、身近に迫り来る保健、福祉、教育に関する多岐に亘る課題を、それぞれ地域社会に残留しているであろう協同相助の倫理を呼び起こしつつ、新しきを求めるに急がず、より正しきを求めたい」

(八木 1994b: 40) や、「我ら福祉施設士は、常にクールな姿勢でありたい。いと小さき存在と共にある立場なればこそ。その専門的知識と専門的技術を包含した倫理観に充ちたあり方を限りなく求め続ける躬なれば」などに(八木 1996a: 40、傍点筆者)、竹内の鋭い嗅覚が窺え、さらに複雑・困難な将来の到来が予測されるなか、社会福祉法人理事長としての立場と、あくまでの施設福祉の従事者としての拠り所を明確にしようと努めている²⁾。

なお、“忙中閑”は学術誌や研究論集などのような堅苦しいものというよりは、むしろ、もっと身近で馴染みやすいことを契機に理解の深化を志向するものとなっており、このことは童話作家の宮沢賢治と“フーテンの寅”こと渥美清の二人を事例にとり上げた竹内自身の論考からも窺える。まず前者については、「生誕 100 年記念として宮沢賢治の思想が、改めて論じられる今日この頃、とくに彼の教育観に注目する。人間に対する評価を社会的価値、尺度で測れば、その長短、強弱は明らかである。が、大自然はすべての存在を肯定、その一つひとつの存在あってこそ、すべての存在が可能であり、一つひとつの存在は精一杯に生き、すべてのかかわりの中に生きる。故に、共に仕え合い、共に支えあっていよいよ活きる。それが彼らしい教育観だった」などと(八木 1996c: 28)、竹内は、宮沢の教育観を基に、障害者たちの存在意義を再認識しようとする。次いで、後者については以下のように語り、生涯に亘り、役者のプロに徹した渥美の姿を自身にも投影し、福祉施設士としての専門性とは何かを熟慮するに至っている³⁾。

渥美清こと“寅さん”は映画と共に消えてしまった。「イヨッ」、威勢のいい寅さん。庶民の心に生き続けた“男はつらいよ”だった。まるで映画を地で行く旅立ちだった。肺がんのため死去、68歳。でも27年間、48作にわたる映画シリーズで、現代人に甦らせてくれた“心のふるさ

と」だった。俳優とは？と聞いたら「すべてが演技で自分で表現するべし」と答えたという。茶毘に付すまで、誰にも言うな、と家族に遺言したそうだ。正に渥美さんは、寅さんのままで亡くなった。日本の言葉の文化の重要な一面を体現し、庶民の体臭としてある真顔では語れないという“ふだん着”の生活文化を逆説的に表現。作者山田洋次氏との不離一体の営みに満たされた足跡だった。

つまり、“寅さん”こと渥美清さんは、役者としてのイメージを大切に、私生活を公にするのを徹底的に嫌い、去り際でもその美学をよく貫いた。それだけに大衆に大きな夢と希望を“たまもの”として残していった。俳優という専門性（プロフェッショナル・スピリット）を社会貢献した、その懸命にして逞しい個人史に一種の感銘を覚える。福祉施設士という立場での専門性は、果たしてどんな姿で社会貢献できるのだろうか。秋いよいよ深まる山裾の施設に、思い巡らすひと時である。（八木 1996c: 28、鍵括弧内ママ、傍点筆者）⁴⁾

つまり、上記の「共に仕え合い、共に支えあって」や「心のふるさと」などの象徴的な文言から、そうした他者への関心や情愛が薄れる世の中で、竹内自身、論稿内で著名人や人気者をとり上げることで衆目を集めると同時に、知的障害者福祉分野にあっては、より多くの他者の関心によっても支えられなければならない実情を訴え、彼らの主張や生き方を自分たちの将来を映し出す鏡としていたことが認識できる。

Ⅲ. 1995年所感と国家試験社会福祉士試験に向けた勉強

1995（平成7）年1月17日に阪神淡路大震災が発生し、高齢者をはじめとする多世代の多くの人々が住宅を喪失し、生活難の直面するなか、竹内も心痛しつつ、年末の所感を書き記している。なかでもこの時、彼が

真っ先に想起したことは「法人内の人事異動」であり(日誌K:1995年12月31日)、具体的には、「眞田町の大久保君を滋賀から迎えたが、着実な対応姿勢は本格派であった。それを評価できずにむしろ退かすような雰囲気や頑固である法人学舎集団であることを知らされた。花岡イズムにひたる同志集団のかたくなさその総括が花岡夫人、形は退く姿勢であっても言葉や指導にない隠然たる営みのあることが動かせない。理事長の継承の立場は、花岡イズムにかかわらず大胆に竹内構想を動き出すことであった」などと(同)、竹内の理事長就任以降も、前理事長の花岡イズムが相変わらず根強く、竹内構想の展開に苦闘していたことが看取できる。

加えて、「学舎方式」については、「①民間性が豊かであるために有機的組織機能がかたくなで非常識な営みが平然と行われている事、その改善は96年度の人事異動でどれ位に到達できるのか、②基本的処遇論に古い形式とかたくなさが残留し、固定定着していて変更や改善には大きな抵抗があり、大久保氏もある意味ではその犠牲者だという認識は皆無である、③事業計画作成の手段は、たしかに大いなる努力であり、ある一種の形骸化している流れに過ぎない。原則的に新たに担当職域に入った職員が、新鮮なる視点で歩むことが必要なのであるが、その夢が殆ど描き出せない」の3点を問題点として具体的に汲み取っている(同)⁵⁾。

一方、1995(平成7)年度には第7回社会福祉士国家試験が開催され、5,887人の受験者のうち1,560人が合格(合格率26.5%)しているが、竹内もこの受験のために勉強を重ねている。日誌内で彼の受験勉強が窺えるのは1995(平成7)年4月25日以降であり、「気分がいい中で法学の勉強に打込む。やはり記載することである。何もならなかった社会福祉士資格への配慮であったように思う。合格率のきびしい壁にぶつかる老骨といわざるを得ない」をはじめ(日誌K:1995年4月25日)、「今日もReportに力を注ぐ。地域福祉論である。時間を要する。少しでも評価を高くしようとする意欲のためである」(同:1996年5月10日)、「一步も外に出る

ことなく模擬試験にぶつかる。現時点での成績は13科目中合格点は1科目、地域福祉論だけ。…(中略)…12月、1月がどう迎えられるか。大変な作戦を組まねばならないときとなる」(同：11月23日)、「社会保障論の終日の学習であった」などにも(同：30日)、彼の奮闘ぶりが窺える。と同時に、社会福祉分野の公的資格への注目と高齢受験者への支援の必要性を示唆していたことが記録から推察される。

IV. 竹内による聲かけ全職員へのアプローチと社会福祉の目標

小諸学舎理事長としての竹内の思想の一端を垣間見れるものとしては、代表的なものとして、竹内(1996a: 16-7; 1996e: 8-14など)があるが、それらは社会福祉施設のイメージアップや望ましい高齢者像などを一般に向けて発信したいわば公式向けの文章であるため、さらにその意味づけを深化させる必要があった。そこで、彼の日誌の記述に着目すると、1996(平成8)年4月時点では、法人内においては「聲かけ全職員への Approach」及び「人事の採用」の2点を重視しているのが看取できる(日誌L: 1996年4月15日)⁶⁾。

一方、法人以外に目を向けると、社会福祉関係者や著名人からも影響を受けていたことが窺え、その一例として、「休養の日、未完成の手紙を片付けることとする。①永田幹夫氏への花岡夫人の法人役員への取扱いの件、②大沢澄男氏の定年後の進路についての所見について回答、③森幹郎氏の用務としての梅吉(伊藤)なる人物の紹介と質問について大西和夫司祭、大江司祭へ。教会貸借関係にある浅井氏との電話連絡はつかず、その緊張関係はいよいよ高まるに到る。電話では通せず、事が進まず、司祭に連絡して○見氏に通報連絡することとする。その方向は早く吾が手を引いて教会委員会代表に託することと思う。教会の伝承のむずかしさを痛感する」などと(日誌K: 1996年3月18日)、彼は、永田幹夫、大沢澄男、

森幹郎らとの関わりを保ちつつ、思案していたことを示唆する。

他方、1996(平成8)年5月27日には、マザー・テレサの言葉を引用し、「人間にとってもっとも悲しむべきことは、病気でも貧乏でもない。自分はこの世に不要な人間なのだと思いますことだ。そしてまた、現世の最大の悪は、そういう人に対する愛が足りないことだ」と(日誌L:1996年5月27日)、自分に言い聞かせ、さらに「マハヤナ学園→淑徳大学創設、長谷川良信、長谷川イズム、教育・家庭・福祉医療の三位一体。倫理←専門知識・専門技術、一羔という営みの存在価値」などと(日誌L:1996年12月9日)、マハヤナ学園創立者の長谷川良信にも思いを馳せている⁷⁾。

このような人間関係や熟慮検討の末、彼は人々を幸福にしたり豊かにするために必要な課題解決の前提となる「ニーズ把握」にとりわけ注視し、それを「日本福祉施設士会そのものの課題は何か」という命題に置き換えながら、以下のように考察する。

Needsは何か。特性を追うのではなく、意図的するものに通ずるのではないか。QC戦略の実践集団、過去に積み上げてきた特性のある集団である。社会福祉医療事業団の指定補助を受けて決議されたことに大いに期待されている。会員は高齢化、その伝承を近代化するために変更し、何を勇敢に変えるべきは変え、何は変えてはならないのか、伝承、継承。ハード面で基本的知識・基本的技術とのための日々の情報としての法改正の朗報は感謝だが、その超越点に倫理(ソフトの領域)がある。日本人はいま勉力ある人材と問えば即応するのみ。沖縄の太田知事。厚生省の菅大臣だ。共通点は草の根の市民住民のneedsに立った姿勢。

①会員の参加、投稿紙上参加、限定されることは弱体化、②各支部の活性化、代表者の配慮が中心、県社協の組織化がスピードアップの反省、③会員でなくても、他の組織や施設との連携をはかること、④山型研修のなかに技術、方法論ではなく、体験的哲学、会員メンバー大多数の

Needsは何を伝承するか、経営学、勉力する主張、知識・技術を超越した倫理観である。哲学でないか、福祉哲学でないか。(日誌L:1996年7月1日、丸括弧内ママ、傍点筆者)

すなわち、ここから、変容と維持における問題は少なくないが、その背景には単なる知識や技術などの獲得を超越することが求められ、そこで究極的に倫理や福祉哲学などを考想した竹内からは、彼自身の内面において福祉理解の深化が見られていたと言っても過言ではなかった。併せて、彼が構想したプランや着想した論点のすべてが具体化には至っていなかったことも確認し得よう⁸⁾。

V. 1997(平成9)年3月30日理事会並びに「永田幹夫を囲む会」への参加

(1) 1997(平成9)年3月30日の理事会開催

竹内は、上記のような考察を経ながらも、後期高齢期に入ってもなお、自身の活動の幅を重層化しようとさらに積極的に論議に参加する⁹⁾。例えば、1996(平成8)年10月24日に開催された総務運営会議では、「25周年記念事業の日の変更」について、「現在の原稿提出状況を見ると担当者からの原稿が遅れているので、12月には間に合わず、今月いっぱい提出として1997年2月11日に記念行事実施とする。記念誌作成1,000部と考え、p.250程度になる」などと論じ(日誌L:1996年10月24日)¹⁰⁾、その一方、同日の理事会では、以下の7点を示唆し、竹内は、目前の課題への対応策を伝達することで、徐々に花岡イズムから竹内構想への転換を印象づけようとする。

【理事会への課題提起】

① 創立以来の一羔運動のルーツを堅持する根幹に支援、処遇論を位置づ

けるが、その現存する実態の中での理解・認識、近代化する法的根拠の変遷の中で、また職員の個々にも多様な価値観に見る見解に対応して、その信仰的福祉哲学に立脚した共有する認知を得る必要があること

- ② 前進する社会参加に group home の基盤整備につき、市民的主張の中にある住民であるとはいえ、法人として基盤整備に、一步も二歩も責任を果たすべき必要があること。現在は専ら職員の好意と善意に甘えているという現状にあること(定款と運営要領の論議に立つ現況)
- ③ 地域の拠点として施設が位置づけられ、いよいよ社会的参加の中で協働体制を築いていく必要性が深まっている。横断的協力関係なしには、障害者 plan の長期構想を描き得ないのではないか。
- ④ 保護者の将来展望は加齢化と共に広く大きく“個”利用者に対する人生 plan も亦大いに語って行かねばならぬ問題である。インフォームドコンセントを含めた施設側理解と家族のいづく利用者に対する全人的認識を共有していかなければならない。
- ⑤ 職員の研修(自主研修)の場を積極的に展開する必要がある。体験相互学習的实践が共に活性化する一助になる。共有する認識にたつこと(中堅幹部は先づはたてる度量をもつこと、失敗しても)
- ⑥ 作業所の社会人(人権尊重の自己実現など)扱いと入所施設の施与的支援処遇の在り方への抵抗。
- ⑦ 地域性社会への同化の社会のなかにたつ“個”の立場。(日誌 L : 1997年3月30日、丸括弧内ママ)

上記の7点の課題提起に加え、彼は、同日の理事会挨拶でも注目すべき発言を続けており、「協働の年と位置付けた。Partnership。それぞれの member の主体的参加のもとその member 一人一人が活性化する状況があってはじめてその思いが、実るもの、その意味では membership との

相関関係があること」(日誌L:1997年3月30日)、「有機的な機能という question があった。古参の職員、新任の若い職員それぞれに価値観、人生観があるなかで主体的参加の中で事が有効に運ばれるためには忍耐強い努力つまり教諭できるところを常に追い求める姿勢が問われると思う」(同)、「そのことは地域在宅福祉の中で現在の最大の課題は、日本の文化の進行整理で血縁地域という家族制度の中核とした共同体が地域エリアを中心に環境的支援の Volunteer」(同)などと主張し、世代間の格差や個人個人の価値観の相違を前面に押し出すのではなく、むしろそうした差異を認めつつも、協働や有機的つながりを強調し、個人個人にそのあり方を問いかける¹¹⁾。「partnership」や「membership」などの文言が全国的に普及し始めていたなかで、それらの実践化のためには個人個人に意識改革や行動変容が求められるという竹内の思考から導出された発言として注目される。

(2)「永田幹夫を囲む会」(1997年8月7日)への参加

1997(平成9)年8月7日、小牧市「相川亭」で開催された「永田幹夫を囲む会」にも竹内は参加している¹²⁾。ここでの出席者は、永田幹夫、春原幸雄夫妻、竹内の4人であり、同日の協議の前提として竹内がまず総括し、「①竹内が新設老人施設(第1種)創立に関する説明を夫妻にしたが、その後も具体的事例として情報され相互学習の場になっていること、②発起人会の結成や具体的に建設創立となれば会計経理に実力があり、信頼性高い若者人材が絶対必要、③春原氏土地は小諸市分であるが、当人の人脈は現在地東部町に深くあるように拝見できること、④③の意味で場所の位置の設定には固定して考えず、所有地の移転や所有権の移動などを含めて考えられないか、⑤④の場合、自治体の理解協力がどのように受け止められるか、更に追求する必要がある」の5点を整理する(日誌L:1997年8月7日)。その上で、各種事項の想定、事業展開上の配慮として、以下の10点を指摘する¹³⁾。

- ① 新規に法人格を取得して春原氏が代行人をたててあくまでも当人中心の運営を考えるか、他法人格所有者傘下にあるのか
- ② ①のことは現状の実体から県としては傘下に位置づけて考究するのが好ましいという
- ③ 運営営業担当（特に、事務長とか、常務理事には信頼性のある若い人材が得られるかどうかは KeyPoint）
- ④ 株式会社滋野自動車の存在と社会福祉法人格との連携関係をどう明確に協働体として関連できるか
- ⑤ 当夫妻ともに絵画に関心をもち、その所有権にも博識である。福祉は文化であり、その共感を最大限に活かせないか
- ⑥ 基本財産の現金の金額の設定限度はないが、基本財産として土地・建物は法人の所有権となる
- ⑦ ⑥以外はすべて運用財産となる。この条件は少なくとも第一種社会福祉事業展開の絶対条件である
- ⑧ 特養は少なくとも上小地方圏、佐久地方圏内はすべて 100% OK（新ゴールドプラン完了の実態。故に具体的その地域 Needs がどう形成され、特性をもつ事業として展開が描けるかが基本。）
- ⑨ 措置費は原則として建設費に充当できない。従って 6 億総額を仮定して 4 分の 1、5 億の自己資金は必要。
- ⑩ ケアハウスは前記 2 地方圏に皆無である。しかしその経営がむづかしく困難にするのが実情であること。

なお、この会合では、「以上の諸件を考慮の上、当人夫妻の決断が待たれること。そのための相談や所見は永田氏は何らおしまないし、共同していきたいが、先づは地元竹内氏の指導助言に待つことが好ましいこと」と結論づけられ（日誌 L：1997 年 8 月 7 日）、ここから、学識者としての永田よりも、地元民として地域密着し、福祉実践にも精通していた竹内の見

解が優先されていたことを解読できる。つまり、事業展開の具体策が考案され、施設福祉の必要性の認識が依然、重みを増す一方で、民間人の理解・協力が不可欠となる状況下では、通暁や調和が鍵となっており、こうした構図のなかで竹内は民間社会福祉事業の推進を模索していたと言える。

VI. まとめ

以上、本稿では、1994（平成6）年から1998（平成10）年までの竹内の思考の特徴並びに彼が考究していた知的障害者福祉領域をベースにした社会福祉観を明確にすることを目的とし、彼直筆の2冊の日誌や論稿などの第一次史料を中心に紐解いてきた。この時期は、竹内の人生史において他の時期と比較してそれ程大きな起伏が見られなかった時期と言えなくもないが、その一方で、熟思や会合を通じ、対応策が具体的かつ詳細に検討されていたことも窺えた。

竹内は、社会福祉法人小諸学舎理事長としての任務を果たそうと努め、一羔の史的変遷を捉えつつも、一方で、H・パールマンや糸賀一雄らの先覚を想起し、個々人の幸福を社会的に把握する意義を改めて明確にしていた。その上で、読者に比較的受容されやすい安易な“忙中閑”への寄稿を通じ、「共に仕え合い、共に支えあって」や「心のふるさと」などの文言を明記し、概して、他者への関心や情愛が薄れる世の中において、竹内自身、著名人や人気者を論稿内でとり上げることで衆目を集めようとしていた。さらに、より多くの他者の関心によっても支えられなければならない知的障害者福祉の実情を彼なりに訴えようともしていた。その具体的展開の一例が聲かけ全職員へのアプローチや有能な人材の採用であり、この過程で社会福祉 Needs を考察する機会を会得し、ここでは単なる知識や技術などに留まらず、その基盤として求められる倫理や福祉哲学などを着想

しており、ここから、彼自身の内面において福祉理解の深化が見られていたことを跡付けた。さらに、1997年3月30日理事会並びに「永田幹夫を囲む会」などでも、実践化のためには個々人に意識改革や行動変容が求められることを痛感し、今後ますます民間人の理解・協力が不可欠となる状況下で、人々の通暁や調和が鍵となることを察知し、こうした認識のなかで竹内は民間社会福祉事業の推進を具体的に模索しようとしていた。

今回は、1990年代の4年間のという限られた期間における竹内の思考や職務を実証的に解明したが、小諸学舎理事長として辣腕を振るい、施設長として熟してくるのが1990年代の後半である¹⁴⁾。また、上田聖ミカエル及び諸天使教会での活躍がいよいよ佳境に入ってくるのもこの頃である¹⁵⁾。いわば、竹内の晩年期と言えるこの時期における彼の役割や展望を実証的に詳らかにすることを今後の研究課題としたい。

注

- 1) 「日中は愛の園訪問記に集中する。概ね完了する」にも(日誌K:1996年6月6日)、幅広く執筆活動を展開していたことが示唆される。
- 2) 「日本福祉施設士会誌への掲載“施設訪問記”愛の園をやっと完了して、10日提出の『社会福祉援助技術総論』に入る」などから(日誌K:1996年6月7日)、ここでも竹内が、原稿執筆と同時に、社会福祉士国家試験受験のためのレポート作成にも動んでいるのが見て取れる。また、「塩田公民館に館長をたずね、山田分館所有の図書目録を提出、大いに注目される」などにも(日誌K:1994年1月26日)、彼の社会貢献活動の一環が汲み取れる。
- 3) 竹内は、社会福祉の専門性に関し、「人と環境及びその関連についての科学的知識に基づいて利用者の現実と状況を適切に判断し、専門知識と専門技術を駆使して倫理性の高い実践を行うことにある」と明言し(日誌L:1996年12月19日)、一方、小諸学舎25年記念誌の編集後記には、「事故処理愛護教材・記録に関する格言」として、次の4つの要点を指摘する。①退職者25年で100人に達し、継続者は堀田次長だけ。多難のplanと協力態勢の整備、別れが縁の切れ目か、②死亡事故feedback 国家賠償法と相反する二極性に対する責任、賠償、法人下の未整備法的未整備。緻密な分析、事実の解明とその分析、

体制整備、対象者理解、職員と保護者の目標課題の相互理解、相反する二極性への共通理解、そのための配慮（参考資料）、③財産管理と活用システム（参考資料）都成年後見資料及び社会福祉士、民法上の理解、禁治産者、後見人との関連、収入と支出への責任体制の整備、職員所見の具体的職場での対応、④人事評価と価値観の模索 自己的オンブズマンの参加、措置費と人件費の関連、倫理と職員指導の心得」（同：10月19日）。

- 4) 他方、この時期に竹内自身もマスコミの取材対象となっていたことが窺え、「晴、そのむし暑い終日であった。朝日新聞記者黒澤氏学舎を訪ねきたり、吾が身辺を話題としてつぶさに取材される。Photo も。面接及び応接室にて約2時間を費す。学舎内にあっての対応」などと記している（日誌K：1994年6月14日）。
- 5) さらに竹内はこの背後に、「①常務理事の処遇論の弱さがある。たしかに事務経理的総務はあっても、その点に基本的弱点がある。懸命ではあるが、②常務理事、花岡夫人、堀内課長（次長）という立場に対抗する主張が通ることはまづなく、常務理事は堀口氏の言うがままに動いている、③吾としてどの辺りで身を引くことが好ましいか、この間において具体的に伝承と継承の異なるところを職員と共に体験学習することである、④そのために法人運営会議を唯一の場として Readership、Membership すべきを思う」の4点があると認識している（日誌K：1995年12月31日）。
- 6) その詳細については、「No.3 Section のなかでのこと『ヤング女史の幼児教育と草創期の協議について』内容——声楽家 young、オルガンは余り上手でなかった。着物でバックを創作。朝祈りに始まり終のときも祈りに終る。子供と共に遊び保育を併行。略歴 1865年スコットランド生。ロンドンの美術学校 Hamilton、保母資格を得て30歳前後に日本に来た。老人の伝道を中心として幼稚園を通しての基本とはいえ、教育・宗教・幼児の三位一体。女性の人権確立を主張。明治31年の日本へ宛てた young 師の手紙を訳している。同時進行の形で young 師は同時と共に9名の保育・幼稚園教師。人々の囲い込みで幼稚園数が拡大した。子供の子、男性＝清水兄、大正12年 young 帰国。大正14年再来の日本に死亡。明治29年日本女子大学校、明治28年広島大学、その後柳城へ、平安女学院とを併行立。聖心女学院、柳城女学院一緒に勉強。芦屋に聖心女学院が移動したので柳城は独立。教育の目的にキリスト教育、子供達家族との協議を中心にした。病患流行で2児が死亡。佛教の葬儀であったが病体は母親や父親の拠点となっている。保育内容、花と草木、フレーベル的、“子供の庭” 神がつくられた1坪の庭が草や花を育てて1坪づつ与えられてい

る。命を与えられている自然界の神のめぐみと喜び、昆虫や草と虫のいのちの“神”のいのちのはぐくみ、その恵みを気付くことであるという。美しき思いは、美しき顔を美しき望みを 1891年(2p) 明治44←24年(施設)」などと記される(日誌L:1996年4月15日)。

- 7) 竹内は、1996(平成8)年12月11日、「論壇 行政改革=基本的な理念」を基に、「社会福祉の目標は、人間尊重を第一として生存権の保障、社会生活上の基本的欲求の充足、ノーマライゼーションの推進などを図ることに置かれる。①現代の社会福祉は援助者と利用者の対等で平等な人間関係、また利用者の人間としての尊厳と自己実現の尊重など倫理性を重視する、②また専門職は利用者との人間関係を基軸にして遂行される仕事であるため、人間的な豊かさ、厳しい倫理性、優れた関係調整能力などが必要。③そしてその専門性は人と環境との関係についての科学的知識に基づいて、利用者の現実と状況を適切に判断し、専門知識と専門技術を駆使して倫理性の高い実践を行うこと」などと認め(日誌L:1996年12月11日)、社会福祉における基礎・基本を再認識している。
- 8) その一方、1994(平成6)年4月1日付の飯沢節子(日本ホームヘルパー協会OB会会長)宛の電文には、「心豊かに描き出したHHの道を大切にのべ伝えられるよう期待しています。ステパノ“竹内”(会場)松本市入山辺 美ヶ原観光ホテル気付 会長 飯沢節子あて。」と記され、この他にも、「マーメイド会の集いに金子さんから以前より申しつけがあり、それへの義理もあって明日、東村山市に飛ぶことに心ずる」(日誌K:1996年8月6日)、「晴、若干の涼風が吹く朝6時30分。電車で上京。10時東京駅に岡谷の飯沢節子と落合う。マーメイド会(東松山市の紫雲閣に向くためである。金子姉からの準備段階での相談に応じ、吉田兄の参加も加わり形が整う。)個々の近況報告に24時間HHの活動を実施する東松山ホームHHの話の中で吸引看護、おむつ交換、体位変換、Rh実施で深夜4回巡回2人1組の作業を展開するとき、介護の老婆がそのまま床に合掌しているという現況報告に強く感動」などから(同:7日、丸括弧内ママ)、75歳時の竹内とホームヘルプ事業との関わりの継続が具体的に認められる。
- 9) その一例として、「聖ミカエル保育園創立50周年記念講演会の日。妻に代わって聖書朗読をする。午後は文化会館において園光による霊歌(第一部)と福井達雨氏による講演会とが盛大に展開された。旅なれた演者という感である。論旨は、①愛情とは愛と憎がほんねとたてまえて混同し、その姿が障害者をもつ親の本姿だと言い切る。愛は必ず自分が損をする道でしかない、②人は私利私欲の思いを抱く人間の道は相手を見つめての共にある相互教育の道という、③

祈りとか、教師、牧師の主唱が尊いが、その具体的実践や実行なくして偽善である。行動と共に金が絶対に必要と。時に演出効果を含めてあくのある感動を覚える講演、特に園光合唱は良かった」などにも(日誌K:1994年12月18日)、講演活動に励む竹内の姿を汲み取れる。

- 10) なお、作成に当たっての問題課題として、「①山口兄妹 case のターミナルケアの記録の原稿。法人という責任においての表現として客観視した原稿としてあるが、宮本理事の意見としては山口家族の了解を得て掲載すべきこと。事実を事実として表現できなければ、その眞実はぼけて了うのでないか。医学的見地、親族の精神的葛藤とその経済的負担、親族の労力提供と Volunteer と利用者の客観的理解と認識、親族の社会的位置故の表現の枠組等々、②自立支援委員会、建設委員会のプロセス記録の原稿。そのまま掲載をとりまとめ、併せて保健医療記録の記録収集につき努力中、③事故 case 記録とその分析には手が届かず、記録としては編集対象としないこと(井出常務理事の思い)竹内としては時間的に間に合わないというのなら仕方ないと思うが、必ず探究すべきところに重要性を思う。具体的事実のほりおこしとその分析は日常業務の普遍的課題に帰着すると考えるし、その意味では自立支援委員会の討議を通じての Needs に共通する思考」の3点を詳述している(日誌L:1996年10月24日、丸括弧内ママ)。
- 11) この他にも、竹内は理事会内で、「gold plan、enzel plan に引続く障害者 plan が同様、市町村エリアを中心に積み上げられようとする時、吾らの新学舎構想 plan に先駆的存在として位置づけていかねばならないし、地域には総合調整の重要性と関係機関に action していかねばならない」(日誌L:1997年3月31日)、「小さな福祉する現場では、最近施設利用者への虐待事件(戸塚ヨットの賠償命令、富士聖ヨハネ学園)のあるなか“他山の石”としていましめねばならぬところ」などを自戒しようとしている(同:30日)。
- 12) 竹内はこの会合に参加する前に、「1997年小 Note、6月23日~6月29日夏の記事の通り。6月27日 19:30~永田幹夫から TEL、その内容は小 Note。7月4日 春原氏へ電話。7月5日ご夫妻アイリス館(理事長室)に来所。相談の詳細を聞く。7月19日夫妻の案内で、現場視察。工場の滋野自動車株式会社を見学。以上の面談結果を手紙にして永田氏に送った(竹内の所見を含めてのこととして総括)。8月6日 TEL にて電話紹介して法人格取得のための要件などを中心に照会(県社会部高齢者対策課係長)」などのメモ書きを認めており、これを基に同会合に臨んでいる(日誌L:1997年8月7日、丸括弧内ママ)。
- 13) 他方、「竹内吉正様 お手紙、深謝、そして感銘仕りました。我々、戦中の生

き残りは戦後、多様な価値観をもちながら、多種の分野で働いて国を復興させましたね。私は隊友会に大分の右翼の親分から共産党の都会議員までが揃って参加、今も戦友として盃を交わしていることに率直に嬉しさを覚えます。単純・素朴！今年は早目に4月26日(金)、靖国神社に献木した『一〇四戦隊の八重桜大会』、近日ご案内申し上げます。長谷川正勝)などから(1996年1月23日付の葉書、二重鍵括弧内ママ)、この頃の竹内は、戦時体験を振り返る機会を得ていたことが認められる。

- 14) 「在宅介護支援センター(?)の候補として上小圏でかりがね。佐久園で小諸学舎が候補として予定されている。県障害福祉課施設係・福祉係・専門官ともに諒承している。年度は平成11年度とされている。長峯学園は古くから実施。その実績は広く全国的課題となっている。来年度は飯田のひまわり学園が対象になっている(第10年度)。移動の吉本主任に将来を担当すると約束させる方向であるという(井出学舎長談)」などから(日誌L:1997年10月5日、疑問符・丸括弧内ママ)、施設福祉の多機能化に思案し始めている竹内が彷彿とされる。
- 15) 同教会員として40余年の年月を経ていた竹内は、「100年史へのわが投稿の要旨、主題“副会長への遺言”」と題し、「①史的に見た設備備品へかかわった具体的事実からのシンプルライフへの提言。教会教育の原点を究めての主張、②宣教、教会、保育園の営みの三位一体への提言。シンプルなスピリット、こだわりとしての不変の源泉としての主張、③伝統と伝承の在り方としての提言。ワーデン制度を否定した上田の弱さと迷いの気づきへの主張、④チームワークの宿命的課題への対応の主張と提言。パートナーシップの協働原点を共同体験、相互学習の必要性への主張」の4点を強調する(日誌L:1998年5月30日)。ここにも、晩年期の彼自身が、福祉と宗教との関連をいかに総括しようとしていたのかの一端が垣間見られ、注目される。

文 献

(竹内吉正に関する第一次史料)

竹内吉正(1994-1996)『3Year Desk Diary 1994-1996』(1994年1月1日～1996年12月31日、本稿では日誌Kとする)。

——(1994)「施設訪問記 宝池住吉寮を訪ねて」『月刊 福祉施設士』(143), 16-7.

——(1996-1998)『RECRUT 1996』(1996年1月1日～1998年5月30日、本稿

では日誌Lとする).

- (1996a) 「社会福祉施設イメージアップ戦略」『月刊 福祉施設士』(167), 16-7.
- (1996b) 「施設訪問記 博仁会櫻荘を訪ねて」『月刊 福祉施設士』(170), 10-2.
- (1996c) 「施設訪問記 神愛会を訪ねて」『月刊 福祉施設士』(173), 16-8.
- (1996d) 「家庭機能・家族とのかかわり——精薄更生施設における事例を基礎として」『月刊 福祉施設士』(172), 15-20.
- (1996e) 「自立した生活の個人史求めて」『月刊 福祉施設士』(175), 8-14.
- (1991) 「程よい緊張関係が施設の暮しには欠かせない」『月刊 福祉施設士』(117), 3-9.
- 八木和風(1994a) 「忙中閑 “男”と“女”というかかわり——現場での課題を中心に」『月刊 福祉施設士』(147), 36.
- (1994b) 「忙中閑 わが立脚するところであって」『月刊 福祉施設士』(150), 40.
- (1996a) 「忙中閑 追い求めたい像ひとつ」『月刊 福祉施設士』(166), 40.
- (1996b) 「忙中閑 としよりの冷や水」『月刊 施設福祉士』(171), 36.
- (1996c) 「忙中閑 専門性と社会貢献」『月刊 施設福祉士』(175), 28.

(その他の書籍・論文)

- 花村春樹(1995) 『「ノーマリゼーションの父」N. E. バンク＝ミケルセン——その生涯と思想』ミネルヴァ書房.
- 花岡暉夫(1994) 『野に咲け矢車草』一羔会.
- 飯沢節子(1972) 「社会福祉を考える」『生活と福祉』(194), 18-9.
- 糸賀一雄(1968) 「精薄児を世の光に」『自警』50 (5), 80-1.
- 輝く奉仕者中部社会事業短期大学編(2003) 『社会福祉人名資料事典 第3巻』日本図書センター.
- 北原広子(2013) 『浪漫あふれる信州の洋館』信濃毎日新聞社.
- 小林精子(1999) 「訪問記 No. 24 長野小諸学舎」『知的障害福祉研究』46 (5), 8-14.
- 水谷幸正先生古稀記念会編(1998) 『仏教福祉研究』思文閣出版.
- 森 幹郎(1991) 「老いとは何か——老い観の再発見」『花園大学研究紀要』(23), 154.
- 室田保夫編著(2006) 『人物でよむ近代日本社会福祉のあゆみ』ミネルヴァ書房.

- 長野県ホームヘルパー協会 (1991)『長野県ホームヘルパー協会二十年のあゆみ』、
永田幹夫 (1981)『地域福祉組織論』全国社会福祉協議会。
—— (1988)『地域福祉論』全国社会福祉協議会。
—— (1993)「地域福祉と福祉改革」『駒沢社会学研究』(25), 35-45。
—— (1997)「私の実践・研究を振り返って (44)」『社会福祉研究』(69), 86-92。
中畠 洋 (2013)『日本における在宅介護福祉職形成史研究』みらい。
—— (2014a)『ホームヘルプ事業草創期を支えた人びと』久美。
——監修 (2014b)『現代日本の在宅介護福祉職成立過程資料集 第3巻 家庭養護
婦派遣事業——長野県上田市資料1』近現代資料刊行会。
日本聖公会歴史編纂委員会編 (1959)『日本聖公会百年史』日本聖公会教務院文書局。
斉藤義夫・小林重雄編 (1978)『知的障害事典』岩崎学術出版社。
水藤家 (2005)『アカシヤの庭から——司祭ヨハネ水藤繁次逝去1周年記念誌』。
上田小県誌刊行会編 (1968)『上田小県誌 第三巻 社会篇』小県上田教育会。
上田市社会福祉協議会50年の歩み編集委員会編 (2006)『住民と共に歩んだ50年』
上田市社会福祉協議会。